Chaos of Hell

karura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Chaos of Hell

【Nコード】

N8452W

【作者名】

karura

【あらすじ】

異世界をも巻き込んでいくファンタジー作品

主人公最強ですww

カオスワールド

「眠いー」

そう言つと同時に、ベッドに頭からダイブした。

俺は携帯を手に取り、メールが来ていないか確かめる。携帯の画面は真つ暗で、電源が入っていない状態になっていた。

あれ、電池切れかな？と思いつながら電源を入れてみると、「画面がぱつと光り一応は起動した。しかし画面には、「スタートしますか」の文字と「YES」と「NO」の選択肢があつた。

こんな画面起動するときにあつたか？と思つたが、この携帯は昨日買ったばかりの新品で、まだ知らないことがあるんだろうと思いつ、とりあえず「YES」の方の選択した。

携帯の画面は、一個前の携帯の時から使っている待ち受けに代わり、「新着メール十三件」という表示に代わつた。

俺は安心しつつ、十三件もメール来てやがると毒づいたが、全て急ぎの内容でなかつたので、起きたら速攻で返そうと思いつ、携帯を枕元に置いて目をつむつた。

目が覚めて、思考が徐々に覚醒されていく。目の前にあつたのは真つ白な世界だつた。

「・・・うーん。ここはどこだ？」

俺は上半身を起こし、辺りを見渡す。

いまいちつかさっぱり状況が呑み込めず、ただ茫然とするしかなかつた。

ここ俺の部屋？などと寝ぼけたことも考えたが、流石に五分もすれば、ちよつとは冷静になれた。

夢・・・にしては映像が鮮明で、思考がはっきりしている、と考えてから自分のプロフィールを思い出す。

名前は藤原ふじわら 蓮夜れんや。高校二年生の十七歳だ。昨日は家に帰つてき

てから、風呂に入つて、晩飯を食べて、宿題などの勉強をしてからあまりに眠かつたので十時ごろには眠つたはずだ。もちろん自分の部屋で。

自分の記憶や思考に問題がないとすると、目が見えなくなったのかとも疑つたが、手を持ち上げてみれば、自分の腕がグーパーと動いている。

ふむ、何の異常もない。

「おい、だれか居ませんかー！」

ただ一人、部屋の中央にいた俺は立ち上がり呼びかけた。返事はなく、虚無感だけが心に広がる。

とりあえず俺は部屋の端まで歩いてみることにした。目的は出口があるとしたらやっぱり壁にあるだろうというのと、この部屋の大さきなども知りたかつたからだ。

部屋には一切のものがなく、自分以外の影もない。本当にまつさるな空間なので、距離感がまったくつかめず、壁がどのくらい先にあるのかもよくわからない。ひたすらに歩いてみたが、一向に壁には当たらず、自分が進んでいるのかさえ分からない妙な恐怖感が出てきた。

「ほんとにここはどこだよ……」

正直に言えば、最初からどこか嫌な予感はしていたが、それでも今現在自分がどういふ状況にあるのか知りたいという好奇心も少しはあつた。

軽く三十分は歩いたが、もといた場所と何ら変化はない。途中で走つてみたりもしてみたが結果は同じだった。

歩くことをやめ、腰を下ろす。床を触ってみるとゴムに近いがどこか違和感のある質感だった。

そういえば全然気にしていなかつたが、服装は寝る前に着ていたスウェットだ。冬も近づきだんだんと寒くなつていたので、一瞬間ほど前に買って来た。上は黒、下は白のほとんど新品のスウェット。下着も完全に寝た時のままだった。

こんなわけのわからない状況で、ここまで自分が冷静でいられるのが少しおかしくなって、軽く口元が緩む。

今更ながら自分の状況を客観的にみてみる。

「えーっと・・・なんの目的かわからないけど、俺が寝た時を狙って、部屋に侵入し、俺が起きないようにこの部屋まで運んできた。つまりは、誘拐・・・かな」

我ながらずばり的中してるんじゃないかという名推理。

しかし、俺の家はごく一般的な家庭で、誘拐なんかをするにはもつと金持ちの家のお坊ちゃんとかを誘拐したほうがいいんじゃないのか・・・と思う。

なににせよ、俺はなんらかの方法でこの部屋に閉じ込められたことになる。この後の事はわからないが、出口すらわからないこの部屋で、無暗に歩き回るも逆に危ない気がする。

俺は寝転がって天井を見上げた。天井も真つ白で、照明器具なんかも見当たらない。本当に何もない部屋だ。目をつむり、俺は今自分が何をすべきなのかを深く考えてみる。

どれだけの時間が過ぎたのか分からないが、俺は元の姿勢で寝転がっていた。

たまに、起き上がってはそこらへんを歩き回ってみたり、大声で叫んでみたりしたが、これと言って反応はなく、結局なんの案も浮かばず、途方に暮れるばかりであった。

すでに自力での脱出に諦めかけていた、ここに連れてきた犯人達理由は分からないので犯罪者とは言えないかもしれないが

に任せるしかないというのが、すでに自力での脱出に諦めかけていた今の俺の考えだった。

まだ、殺されたり、拷問されたりすると決まったわけじゃない。

だいいち、万引きすらしたことがない俺には、そんなことされる筋合いもない訳だが、誰かの恨みを買っていたりすることはあるかもしれない。どつちにせよ自分の力ではどうしようもないと考えた俺は、ただただ時間が過ぎるのを待った。

本当に何も無い空間では、時間が過ぎていくのかさえ分からなくなる。自分の心臓が動いているのを感じなければ、本当に止まっているように感じているだろう。

たぶんこんな状況がずっと続けば、考え方とかがおかしくなって自我が崩壊したりするかもしれないー、と自分でも苦笑するほど楽観的に考えていた。それが犯人の目的かもしれないが、最終的には分からないという答えにたどり着く。

途中からは考えることすらやめて、ぼーっとしているだけになった。

体感的には、五時間は軽く経っていると思う。空腹感などは全くなかったが、危機感は徐々に高まってきていた。

正直に言うと、そろそろ耐えられなさそうになってきていた。いつまでたっても出られない。それは純粹な恐怖である。

これはある意味一種の拷問だなと純粹に思った。

九九七・・・九九八・・・九九九・・・二万七千・・・一・・・二・・・三・・・。

心臓が動く音を無意識に数えていた。約一秒に一回のペースでドクンと力強く血を全身に送り出している。単純計算で、脈打つ数を数えはじめてから七時間が経っていた。

未だに状況の変化はなく、始めに持っていた好奇心は全くない。危機感も薄れてきていた。単純に思考が鈍ってきているからかもしれない。

既に手遅れかもしれないが、思考を正常に戻すためにとりあえず立ち上がってみた。普段より体が軽く感じる。これも思考が鈍っているせいかと思ったが、それは少し違うと思った。

軽く歩いてみる。羽が生えたみたいだという形容がよく合うぐらいに自分の体が軽く感じる。

ためしに全力で走ってみたりもした。この特殊な空間のせいで視

覚的には分からないが、体感的には速く走れているような気がする。もう訳が分からなかった。ふと俺は実はもう死んでいるんじゃないか・・・という考えが思い浮かぶ。ある意味一番現実味があるかもしれないと思ったが、そんなことを考えても始まらないと思い、そのことを考えるのをやめることにする。

体が軽く感じるようになったのは、なぜだかよく分からないが、状況にもなんらかの変化があったはずだと思った。

歩きながら、体のあちこちを探ってみる。これと言って変わったことはなかった。この真っ白な部屋も変わらず虚無だけが広がっていた。

ズボンのポケットの中に手を入れたところで、歩みを止めた。ポケットの中に何かが入っていた。出してみると、それはタッチ式の携帯端末のようであった。縦に十センチ、横七センチほどの大きさで、携帯電話にしては大き目のサイズだった。黒光りしたそれは、異様な雰囲気を放っている。

もともとそれはポケットには入っていなかったはずだ。自分の服装に気付いた時にポケットには何度も手を入れてみたり、裏返してみたりもした。しかし、こんな携帯端末は入っていなかった。元からなかったというのなら、いつどうやって入れたんだという疑問が浮かんぶ。

どんなに思考が鈍っていても、この部屋で気づかれずにポケットにこれを入れるのは難しいはず。俺は一度も意識を落とした覚えはないし、そもそもこの携帯端末はおかしい。重さは普通の携帯電話と同じだが、さっき走ったりしたときには、なにも感じなかった。普通ポケットにこのぐらいの重さの物が入っていたら、気が付くはずだ。

ためにポケットに携帯を入れてジャンプしてみた。ポケットに違和感はなく、物なんてなにも入っていないように感じる。ポケットを触ると、携帯端末の感触はなかった。やばい落としたか!?!と慌てて地面を見るが、なにも落ちておらず、ポケットの中に手を突

つ込むと携帯端末は当然のようにそこにあった。

不思議に思つて、ポケットから手を出して、ポケットの外から携帯端末に触れようとする。しかし、あるはずの場所なのに携帯端末の感触は感じられなかった。ポケットに手を入れれば触れられるのに、外からは触れられない。左のポケットでもやってみたが、同じことだった。

「どういうことだ？」

俺は首をかしげた。

つまりこの携帯端末は、ある時いきなりポケットに出現して、ポケットに手を入れないと触れられないという代物であるということだ。そんなものこの世にあるか！とツッコミを入れそうになったが、とりあえず落ち着けと自分で自分を落ち着かせた。

非現実的な事は、なにも今に始まったことではない。冷静になつて改めてこの端末を見ると、一個のスイッチもなかった。ためしに画面をタッチしてみると、なんの反応もない。念入りに調べるが、反応なし。無茶苦茶に画面をタッチしてみたり、真上に投げてみたり、声をかけてみたりしたが、結局ピクリともしなかった。

それでも諦めずにいろんなことを試していたら、偶然か必然か画面を覗き込んだ時にちかつと画面が光った気がした。

顔をより一層近づけて、画面を食い入るように見つめる。今まで気付かなかつたがウィーンという起動音のような音がしていた。音が消えると同時に、パツと端末の画面が青白い光を放った。俺はあまりの光の強さに思わず目を閉じる。

画面には、「ゲーム参加おめでとうございます」というきらきらと装飾された文字が並んでいた。

読み終わって三秒も経たないうちに画面が切り替わって、キャラクターネームを選択してください、という表示に代わった。

選択肢は三つあって。俺は『カルラ』という自分の名前に一番近かつた名前を選んだ。

咄嗟に案内に従ってしまったが、これってどうなんだろうと思っ

たが、この携帯みたいな不思議端末に頼るほかに選択肢がなく、今はただ「現在ダウンロード中」と表示された端末をじっと見つめていた。

十数分ほど待つと「ダウンロード終了」という文字と共にポーンという効果音がした。

続いて表示されたのは、アニメーションのキャラクターのような妖精の女の子だった。画面の中を自由に飛び回った後、妖精はこちらに向けて自己紹介を始めた。

「こんにちは。私の名前はレナです。よろしくお願いします」

レナと名乗った妖精の女の子は、丁寧なお辞儀をした。

「よろしく」

なんとなく挨拶を返してしまった俺は、何をしているんだと馬鹿馬鹿しくなる。正直この妖精が生きているように見えたのだ。

レナは俺の返事を聞いてかそれともただのプログラムなのか、軽く微笑んだ。

レナという少女を他のだれかが演じているという場合もあったが、この時には完全に俺はレナという少女が独立した存在であると認識してしまった。

こんなことをしている場合じゃないと言おうとしたが、俺が口を開く前にレナは言葉を発した。

「最初にあなたがいるその空間は、現実のものとは異なります。現実のあなたは寝ていて、この世界は一種の夢のようなものです。ただし、あなたが感じるとおりこの世界にも感覚があります。見えるものや触れるものも現実のものと同じです」

・・・ここが夢の世界？

なんとというか驚きというよりも、疑いの方が大きかった。顔にも出てしまったのか、レナは説明を中断し俺の顔をじっとみている。

疑いは説明を聞いた後でもいいかと思いい「続けて」とレナにお願いした。

正直に言えば、この子が嘘を言っているようには見えないというのもあった。

「はい。ただ、この世界と現実の世界で共有しているものが二つだけあります。それは時間と命です。時間の方は想像がつくかと思いますが、命とは即ち、こちらの世界で死んだ場合、現実世界でも死ぬこととなります」

出来るだけどんなことを言われても冷静でいようと思っていたが、流石にそんなことを言っている場合ではなかった。

「待った！！いろいろと聞きたいことが出てきた」

「今は質問に答えることが出来ません。全ての説明が終わった後、質問に答える時間を作ります」

今までいろいろと疑問を飲み込んできた俺も、流石にキレて、携帯端末を床に叩きつけそうになったが、この端末以外にここから出られるヒントが無いと思えば死に怒りを抑えた。

そんな俺の心境を知ってか知らずか、レナと言う妖精のプログラムは至って冷静だった。

「説明を続けます。この世界は夢です。そしてゲームの世界です。今は何も無いこの空間も数時間後にはファンタジーな世界になっていると思います。そしてそのゲームをクリアすることによって、この夢は終わり、あなたは現実の世界へ戻ることが出来ます。それまで現実の世界のあなたたちの体の安全は保障されています。大まかな流れはこんな感じですよ。ゲームの内容はよくあるRPGです。質問があったら言うってください」

俺はある程度、冷静さを取り戻し、焦っても無駄だと自分に言い聞かせた。

「ここが仮に夢の中だでしょう。しかし俺の体はどこにある？それにどうやって俺の夢に干渉できる？どうして俺を選んだ？」

他にもいろいろと聞きたいことがあったが、今すぐ聞きたいことを三つだけ選んだ。

「順番に行きましょう。あなたの体は現在、とある機関に隔離され

ています。安全対策は完璧なので心配ないです」

とある機関つてどこだと問いただそうとした。しかし、あくまで画面の中の存在であるはずのレナの瞳には「黙って聞いていなさい」と言わんばかりの光が満ちていた。俺はもう黙るほかなく、レナは一度頷いてから、また説明を続けた。

「次に夢への干渉についてです。これはとても難しいんですが、あえていうならば、この世界はあなたの夢というよりも、人工の世界にあなたの意思を持ってきて、あなたにこの世界での夢をみせているような感じですよ。あなたが夢を見て体験し、どのような行動をとるのかを脳の神経から読み取り、高速で処理し、この世界に反映させているのです。ただしあなた方の本体が夢を見ていると言っても、今のあなたは起きている状態です。あなたの思考は普段と変わらず、この世界なのですが、体は動かせません。

つまりあなたは、人工的に作られた世界に意識だけ、思考だけが存在しているということです。あなたがこの世界でどれだけ動こうと、現実の世界では一切の動きはありません。逆に現実の世界であなたちがどれだけ動こうとこちらの世界には一斉関係ありません。今あなたにとって重要なのは、現実の脳とその思考、それにこの世界だけです。

最後にどうしてあなたを選んだかですが、別にあなただけが選ばれたわけではありません。ほかにも選ばれた者はたくさんいます。ほかに質問はありませんか？」

表情を変えずに淡々と説明したレナは、ここぞとばかりに優しい笑みを浮かべた。

ここまで来ると全て信じられるような気がしてきた。

「なぜこんな事をするんだ？」

「目的は、データがほしいからです」

「なんのデータだ？」

「言えません」

レナはきっぱりと、今までで一番意思のこもった声で言った。

俺はそれ以上聞くことが出来ず黙るしかなかった。

「お前は生きているのか？それともただのプログラムなのか？」

俺が聞くと少女は苦々しげな表情で「私はただのプログラムです」と答えた。

「そろそろ時間です。私の役目はここで終わり、ゲームを楽しんでください」

レナがそういってブーンという効果音と共に画面は暗くなっていた。

「ちょ、ちよつと待ってくれ」

俺は半ばすぎるように端末に話しかけたが、レナの体は徐々に薄くなり、結局見えなくなった。

画面の全体から光が完全に消えると同時に突然、俺の体を青い光が包んだ。

嫌な浮遊感の後、青い光が消えて視界が晴れる。俺は整備されたてのような石の床の上に立っていた。

視界には大勢の人間が映っていた。

多すぎて人数はよく分からないが、三百六十度、見渡せる限り人しかない。相当な人数だろう。

自分も含め全員の服装は、中世ヨーロッパの庶民の服装ってな感じだった。

男女比は見た限り六対四程度で男の方が多いように見えた。

全員が声も上げずにひたすらに上を見上げていた。何かあるのかと見上げてみれば、そこには白と黒の縞々ピエロがいた。他の色は全くない。肌は真っ白、唇や鼻は真っ黒、見た目が不気味で見ていると何故だか吐き気がしてきた。しかし、そのピエロには目が離せない何かがあった。

ピエロは大きく息を吸い込み、声を上げた。

「全員そろったね。やあ、ようこそこのゲームの世界へ！！この世

界の名前はアナザーワールドだ！！

その名の通り、君たちが住んでいた世界とは異なる世界と想ってもらえばいい。

今から始まる命がけのゲームをクリアしないと、元の世界には戻れない。そしてこの世界での死は現実世界での死を意味している。ここまででは聞いているね！！」

陽気という形容がよくあうその声はなぜだか、限りなく耳障りであった。

「じゃあゲームの内容を説明するね。今君たちがいるのは、始まりの街。名を グランゼル そしてこの島の名前は ウーノ イタリ ア語で一という意味だね！！すなわちこの島は一の島ってことだ。

君たちにはこの島を攻略してもらおう。攻略というのは、島の解放されている部分を順番に回って行って、その先にあるダンジョンの奥にいるボスたちを倒してもらおう。ボスを倒すとまた島の一部が解放されて、またその先にあるダンジョンを目指す。そうやって島のすべてを開放して、次の島へ行ける船着き場の町を目指すんだ！！ 攻略すべき島は何個もあって、すべての島を攻略したら、晴れて君たちはこの世界から出れる。分かったかい？」

異議を唱える者はいなかった。このピエロの言っていることが脳に直接書き込まれるような感覚がした。今から何をすべきか分かるいや、分からせられた気分だった。

「街などのセーフティゾーンにはモンスターは現れないし、入れない、ダメージも発生しない。だから安全地帯にいて、だれかがクリアしてくれるの待つのもありだ。そのほうが賢いかもしれない、だけどそれじゃあ元の世界に戻るのは遅くなる一方だよ。まあ強制はしないけどさー」。

セーフティゾーンの外、フィールドではプレイヤーはダメージを受ける。モンスターから攻撃を受けたり、一定以上の痛みを受けたりしたらダメージが発生する。HPがゼロになればその瞬間、こちの世界でも現実世界でも死ぬ。それを肝に銘じといてね」

なんとも軽い口調だ。命の重さなんてみじんも感じられない。

人々は声をあげずにただ立ち尽くしていた。いや、声を上げようとしても声が出ず、動こうとしても動けない。ここに居る全てのプレイヤーと思われる人々は、ピエロの説明を強制的に聞かされていた。

「この世界はファンタジーの世界だ！近距離攻撃は結構何でもアリ。遠距離の攻撃は、弓矢とナイフ系の武器だけにしたよ。

ファンシーな魔法なんかも付けたほうがいいかと思ったんだけど、難しそうだったから今はやめといたよ」

今、というところを強調したように聞こえたが、そんなの気にしていらなかった。

「まあ、後は取説読んでおいてね。君たちが持っている『ポル』っていう携帯電話みたいなのでいろいろ出来るから」

うんうんと言う風に頷くピエロはとても楽しそうであった。じゃあと言って手を広げた。

「君たちはもうこの世界の住人だ。名前も今から新しいものに変わる。がんばって元の名前を取り戻してくれ！」

ピエロがそういった途端、心の端から何かがぼつかりと空いた気がした、いや気のせいではない、元の名前が思い出せいのだ。

自分の名前は「カルラ」そう認識させられた。

「今から練習がてら、モンスターと戦ってみようか！！」

ピエロがパチンと指を鳴らすと同時に青白い光が再び俺の体を包んだ。

初めての戦闘

目を開いたそこは一言で言うならば闘技場と呼ばれるような場所だった。

約百メートル四方の硬い土の床、その周りには客席と思われる木材で作ったベンチがずらーとならんいる。真上には闘技場の四つ角から伸びた柱が交差して、盛大なオブジェクトが作られていた。

もうここが元の世界ではないのは認めざる負えない。

この場所の作りなんかもそうだが、瞬間移動なんてことは出来るわけがない。

流石にすべてを受け入れることは出来ないかもしれないが、俺が出来ることはやろうと思った。

ここから出るためには、あのピエロ男の言うようにゲームをクリアするしかないと思う。最近は一バースタルテクノロジーを利用した、フルダイブ型のゲームも出来たとニュースでやっていたが、ここまですべて精密な作りではなかったはずだ。映像の粗さで、ゲーマーからは批判が出てたくらいだったらしいから。

この世界はというと、全く現実の世界と同じ作りであるように見える。

だいぶ落ち着いてきて、これまでであったことを整理する。

もう逃げられないことは明らかだ。

ゲームのクリアを目指すには強くならなければならない。

そして強くなるにはまず、この世界での戦闘に慣れる必要がある。あっちから戦闘の練習をさせてくれるというのだから、拒否する道理はない。

「さーってモンスターってのはどんなもんだ」

俺はその時ある意味、ワクワクしていたと思う。何故だか自分はこのようになるのが運命だったとさえ感じられた。

「こんにちはカルラ」

いきなり真後ろから声をかけられ、警戒して素早く後ろに振り向いた。そこには女のピエロがいた。さっきの白黒のピエロとは違い、今回のピエロは赤と黒のピエロで、まがまがしい感じがした。

本当の名前を忘れた記憶もあるのだが、「カルラ」という名前が最初から自分の名前であったような感覚の矛盾について考えながら、相手を睨みつけた。

素手で戦うのか？と疑ったが、相手がすぐに否定した。

「私は敵ではないわ」

そういつて女は微笑んだが、正直不気味なだけだった。身震いするような寒さを感じたが、いきなり襲ってくるようにも思えなかった。俺は気を張ったままだが、体の緊張は解いた。

「じゃあ練習を始めます。武器は何にしますか？」

唐突にそう聞かれ、少し焦ったが、最初のピエロの説明を聞いたおかげで、どんな武器が使えるのか自然と分かった。

「じゃあ、剣で頼む」

「片手剣、長剣、大剣、太刀のどれにしますか？」

長剣と太刀で悩んだが女が「後で自由に変更できます」と言ったので、そんなに深く考える必要はないかと思い、俺は「長剣」と答えた。

女は指をパチンと鳴らすと三本の鉄の剣が、俺と女の間の空中に現れた。形は少しずつ違い、どれも切れ味はよさそうだった。

「振ってみてもいい？」

俺が聞くと女は軽く頷く。

右にあった剣を持つ、見た目よりもだいぶ軽く感じた。俺はその剣数回振ってから、地面に思いっきり刺した。思ったよりも深く刺さり、抜くのが大変だななどと思った。

真ん中の剣はさっきのよりも少し重く、割と長めの剣だった。その剣も数回振ってからさっきよりも力を抜いて地面に刺した。重いせいか、さっきとあまり変わらないくらい地面に刺さってしまった。左にあった剣は他の二本と比べると割と細めだった。長さは真ん

中の剣と同じくらいで、重さも細い割に重く、真ん中の剣よりも少し重いくらいである。数回振ってみると、他のよりも振りやすく感じた。俺は女に「これにする」というと地面に刺さっていた二本の剣は青く光って次の瞬間には消えていた。剣が刺さったはずの穴も消えている。

「俺の心配は無用だったな」

俺が呟くと、女は訝しげな表情で首をかしげた。俺が「なんでもない」と言うと、女は頷いた。

「ではまず、動かない敵から行きましょう」

そういうと女はパチンと手のひらを合わせた。次の瞬間、世界が少し変化した。

現実世界より少しデフォルメされて、よりゲームの世界に近づいた感じだ。自分の手をじっくり見ると薄くても確かにあったはずの毛がなくなっており、毛穴も消えていた。

デフォルメされたと言っても、ドットなんかで構築されているのではなく、元の世界が丸みを帯びたような、とにかく言いにくいのが、映像はゲームのようなトゥーンの世界、それでも歪な感じはなくてある意味こっちの方が見てくれはいいんじゃないかと思うほどだった。女もリアルではあるが、確実にゲームに出てきそうな雰囲気になっっていた。

しかし感慨に耽れるのはそれまでであった。目の前に煙が現れ、それが晴れると、プルンプルンと動く緑色の奇妙なものがいた。

たぶん他のゲームならスライムと呼ばれるであろう緑色のモンスターだ。

そのリアルな質感はデフォルメしてあっても十分に嫌悪するに相応しかった。もしもデフォルメしていなかったらと考えると吐き気がするほどだ。

「これを斬ってください」

女はスライムを指差す。

渋々ながら俺は頷いて、その場で蠢いているスライムに剣で触れ

てみた。剣から伝わる感触はぞつとするものだったが、この程度のモンスターを斬れない程度では、到底生き残れないと自分に言い聞かせた。

俺は一步下がってから深呼吸をしてから覚悟を決めた。

大きく左足を踏み込み、両手で持った剣を右肩の上から八割ほどの力で振り下ろす。

スライムは右上から左下に斬られ、真っ二つになり緑色のポリゴンとなって消滅した。

茹でた野菜の方が硬いんじゃないのかと思うほど手ごたえはなかった。全てのモンスターがこんなに柔らかい訳がないと思うが、少し拍子抜けした。

「練習は今の一回でよろしいですか？」

俺はこれ以上練習は必要ないと思い、軽く頷く。

もうすこし試したい気もしたが、これから始まるのも練習なのだ。「では、本番に行きますね。本番と言っても今回はHPがゼロになっても現実の死はありませんので、存分に戦ってください」

女はそういうとボンと煙を上げて消えた。

HPがゼロになると死ぬという事については、あまり現実味が無い話だったが、それでも今回は死なないと聞くと、心の底からほっとした。

「これから本番の練習があるわけだな」

俺はふつと笑みをこぼす。

皮製の長ズボンのポケットから軽快な音楽が流れてきて、ポルと呼ばれる端末が細かく振動している事に気付いた。

ポルをポケットから取り出すと「HPを頭上に表示します」というメッセージが流れた。頭上を見ると青いカーソルと緑色のゲージ、それに450/450という文字が表示が出ている。

文字はどんな角度から見ても同じように見えて「これはすごいなー」と普通に驚いてしまった。結構ゲーム的な展開だなと思う。

下に向き直り、ポルの画面を見ると残り60と表示された数字が

59、58と減り始めた、モンスターが出てくるまでの時間だろう。じつと数字が減り続けているのを見ていたら、

「モンスターの討伐数によって、有益な情報やアイテム、スキルなどが手に入ります。HPがゼロになる前にたくさんのモンスターを倒してください」

というメッセージが残り三十秒になったところで流れた。

「ボーナスがあるのか、こりゃがんばらなくちゃな」

俺は独り言を呟いてカウントダウンが残り十秒になったところでポルをポケットにしまった。左手で持っていた長剣をしっかりと両手で持ち、下段に構えてモンスターが出現するのを待つ。

ボンという爆発音とともに数十メートル先で白い煙が上がった。

煙が晴れると、そこには十体ものモンスターが現れていた。

「うはぁ・・・」

現れた瞬間にいきなりものすごい勢いで走ってくるモンスターに啞然としてしまう。

ビックリというよりコワイの方があっているだろう。

俺は恐怖心を抑え、より一層強く剣を握りしめた。動けるスライム程度の強さなら何匹いようと相手にできると思ったが、今こちらに向かってくる敵は、イノシシのような敵と二足歩行のゴブリンと呼ばれるようなモンスターがいた。

かなりの距離があった間が、二十メートルぐらいになったところで、モンスターの頭上にあつた、真つ赤なカーソルの下にモンスターネームと思われる『コデベ』と『ゴブリン』という表示が出てきた。

俺はそれをモンスターの名前だと予想した。

すでにモンスターとの距離は十メートルを切っている。今にもふるえそうな足に力を込めて、戦闘体勢をとる。

最初のコデベは人間のダッシュ位の速さで勢いに任せに突っ込んできた。俺は単調な突進攻撃を右に躲し、両手で剣を持って突きを繰り出した。

本気で繰り出した突きはコデベの横腹あたりに深く刺さり、引き抜くと同時に緑色のポリゴンとなって消滅した。

雑魚中の雑魚のはずだがやはりスライムよりも感触的には数段硬かった。それでも一撃でそいつを倒せた俺は十分な自信を得た。

「よし。戦える」

言いながら次の攻撃に備え、俺は剣を構え直す。

小学生になったころから家にある道場で父親から剣道を習った。

剣道と言っても正直なんでもありの打ち合いだけなのだが、父親の強さは半端ではなくて結局は一度も勝てなかった。

稽古が厳しかったが、それでも剣術を習うのは楽しかったから止めようとは一度も思わなかった。部活には入ろうとは思わず、ひたすら修練を積んだ。

その努力が十分に役立った。

最初には十体もいたモンスターが残り二匹となっている。

コドラは動きが単調で、ゴブリンは動きが鈍く比較的戦いやすい敵だった。ダメージはほとんど受けることはなく未だに半分以上残っている。

疲れも出てきたが、残り二匹ぐらいなら軽く倒せるだろう。

残り二匹となったゴブリンは叫び声をあげながら同時に左右から襲いかかってきた。俺は焦ることなく右から襲ってきたゴブリンに向かって突進した。

ゴブリンが振り上げた右腕を俺は、両手で持った剣を振り上げ、肩口から切断する。

ゴブリンはうめき声をあげ後退するが、俺は容赦することなく剣を一閃する。ゴブリンの上半身がずれ、傾きかけたところでポリゴンとなって消滅した。

俺は勝ち誇ることなく真後ろを見る。仲間がやられたのがショックだったのかも一匹のゴブリンは途中で走ることをやめていた。

俺と残されたゴブリンの視線が一瞬だけ合った。それが合図だった。

たかのように俺は駆け出した。

二十メートルぐらいあった距離が一気につまる。

緩やかな動きのゴブリンの引つ掻き攻撃を難なく避け、背後に回る。背中を向けたゴブリンは慌ててこちらに振り向こうとするが、俺はそれを待つことなく、右手で持った剣をゴブリンの背中に突き刺した。

最後のゴブリンがポリゴンとなって四散する。

俺は荒れた呼吸を整える。剣をだらりと右手に持ち、大きく息を吸い込む。

ほとんどのモンスターは一撃で倒せたがそれでも疲れるもんは疲れた。今すぐにも腰を下ろして休憩したかったが、まだ敵が出てくる心配があるので経ったまま休憩することにする。

その判断は正しかったようで、三十秒もしないうちに次のモンスターは現れた。

先ほどと同じような爆発音と白い煙と共に出てきたのは、身長が軽く三メートルはある巨体の熊だった。ポリウムで言うと相撲取り三人分ぐらいはある大きさだ。

モンスターの頭上には真っ赤なカーソルとグリズリーという文字。熊のくせに二本の脚で器用に立っていた。口からは涎がたらたらとたれ、鼻息の音が二十メートルは離れたここまで聞こえる。

グリズリーはいきなり前足を地面に着いて突進攻撃を仕掛けてきた。不意を突かれたのとあまりにそのスピードが速かったので俺は回避動作をするのも忘れてその場に固まってしまった。グリズリーの瞳からほとばしる殺気としか言いようのない、異様な圧力は一瞬で俺の体を包み込んだ。

それまでのモンスターは、見た目こそ不気味だったが、生理的な生きるために必要な恐怖は抱かなかった。

しかし、今日の前に迫ってきているモンスターはの迫力は、十分

にそれを引き出した。

両者の距離が残りが五メートルを切ったところで、俺は一步後ずさる。自分の意思で起こした行動ではなかった。疲労が溜まっていたことと、恐怖で膝が震えていたことで、思わず転んでしまった。転びながら本気でやばいと思ったが、幸運にも転んだことによつてグリズリーの突進攻撃の直撃を免れたようだった。

俺は両頬を思いつきり叩き、剣を握りなおして立ち上がる。

グリズリーは自分の突進の勢いを止めるのに時間がかかったようで、十メートル以上離れたところで止まってこちらに向き直った。その野性的な眼光を見た時にまたすくみ上りそうになったが、しっかりと気を保つて剣を下段に構える。

グリズリーは「ウオオオオ」という雄たけびをあげなら猛スピードで突進を仕掛けてきた。その迫力はすさまじいものだったが、俺は敢えて前方に体重を傾けた。

グリズリーの突進をギリギリのタイミングで右にジャンプして躲すことが出来た。突進して隙が出来た無防備な背中を攻撃しようとしたが、グリズリーは急ストップして俺の突きをそのゴツツイ腕で弾き飛ばした。あまりの衝撃に俺の左腕はビリビリと痺れ、剣を振り落としそうになったがなんとかそれは耐え凌いだ。

・・・なんであの勢いから急ストップできるんだよ。

一回目の突進の時は急ストップ出来なかったのに、二回目の突進の時は驚くべき反応スピードで俺の剣を防いだ。俺は一定の距離を保ちながらぐるぐるとグリズリーの周りを歩いく。グリズリーは俺の体を正面に捉えつつ隙があれば、いつでも攻撃できるという視線をこちらに送っていた。

こいつは今までのモンスターと比べ物にならないくらい強い。第一印象からそう思ったが、想像をはるかに超える強さだった。

巨体に似つかわしくない、俊敏な動きにあのパワー、おまけに知能まであると見える。二度目の突進の時は、俺が意図的に躲したのを見て、すぐに防御動作に映った。

俺は一種の感動を覚えていた。

最初はモンスターの巨体と迫力に飲まれてしまった。それは今思えばどうしようもないことだと思った。

というより割り切った。

しかし、しつかりと動きを見てみれば、乱暴に力を振り回すだけの木偶の坊ではなかった。

モンスターとは単純な動作とほんのちよっぴりの思考ぐらいしか持ち合わせていないと考えていたが、モンスターは俺の動きに合わせて、自分の考えで行動している。これが練習の相手というのならば、この先もつとつと強いモンスターたちが出てくる。そう考えるとゾクゾクと体が震えた。

恐怖からの震えではなく、純粋な武者震い。

根っからの負けず嫌いだった俺は、親父に一日に一回は決闘を申し込んでいたし、たまに道場に来る親父の知り合いなんかにも勝てるようになるまでその人が来るたびに試合を申し込んだ。

こっちが勝者となっても、向こうから来る挑戦は受けたし、負けないように努力もした。

親父という絶対強者は破れなかったが、それ以外の人には一度は勝利を収めたし、親父にもいつかは勝つつもりでいる。

この世界でも強者と戦うのは最も望むべきイベントに思えた。

俺は歩みを止めグリズリー真正面に立ち、突進攻撃に備えた。しかしグリズリーは突進を仕掛けずただただグルルルと唸り声をあげているだけだった。

その態度が次はそちらから来いとグリズリーが言っているように聞こえた。俺は、ニヤツと笑みを浮かべてからグリズリーに突っ込んだ。

グリズリーは後ろ脚だけで立ち上がって、前足を大きく広げて雄たけびを上げた。ビリビリと皮膚に感じる圧力を受けながらも、俺は正面から突進を仕掛ける。

グリズリーは前足を使って攻撃してきたが、俺はそれを反射的に

躲し、隙を見つけては長剣で斬りかかった。

グリズリーの動きは恐ろしく早く、避けきれない攻撃もあつて徐々にHPは擦り減つていった。

HPのゲージが半分以下になると黄色のゲージとなり、俺をより一層焦らせた。

俺はグリズリーの背後や懐に入ろうとしたが、グリズリーはそれを許さず、後ろにジャンプして後退したりして、正面にしか俺を立たせないようにした。

「そんな動き熊にはできねーよ」と思わず突っ込んでしまったが、それぐらいグリズリーの動きには感嘆すべきだった。

何分もの死闘が続き、精神力の限界も近づいてきた。

グリズリーの体にも数本の切り傷や大きな刺し傷が出来ていた。

しかし俺のHPも残り百を切り、ゲージが赤く点滅していた。グリズリーは未だに俊敏な動きで全く、倒れる気配がない。本当に倒せるのかと思うほどにタフだったが、負けを認めるのは癪なので、俺は全力でグリズリーと戦い続けた。

息は荒れ、剣を握る握力もだんだんと衰えてきた気がする。グリズリーの動きはだんだんと読めてきて、避ける分にはいいが、反撃するには体力が少なすぎた。

俺の集中力が一瞬途切れたところをグリズリーは見逃さず、大きな爪で左肩を大きく抉った。現実世界のような大げさな痛みはなかったが、確かな痛みと不快な痺れが左腕を襲った。

「……つく……」

俺は数歩後退して右腕に剣を持ち直し、目を細めた。

HPは残り十三という残り一撃でも受けたら、ゼロになってしまふ頼りない数字だ。それでも俺はあの一撃で死なずに済んでよかったと心底思った。

グリズリーは勝利を確信したのか、大きな雄たけびをあげながら、

地面を前足でだんだんつついている。

そんな勝ち誇った様子が、昔道場で戦った、二、三歳の離れた、チャライ男に似ていて少しムカツとなった。

親父が見ていたら「なんだそのザマは」といいそうだなーと考えると自然と笑みがこぼれる。俺は最後の力を振り絞り右手一本で持った剣を上段に構えた。左手はだらりと下げたままでもジンジンと痛みが出てきている。

痛みだけではなく、HPも数秒に一づつ減っていった。

だが、ここに来て俺は逆に冷静だった。

俺は目の前のグリズリーとの勝負の事だけに思考を持って行き、ふーと息を吐きながら気持ちを整えてる。未だかつてない集中力を発揮している事が自分でも分かった。

グリズリーはこれで止めだと言わんばかりの猛烈な突進を仕掛けてきていたが、俺にはその突進がこれまでの数分の一の速度に見え、軽々と躲せた。

グリズリーはそんな俺の行動に合わせ、急停止と右手のパンチを繰り出してきたが、俺はそのパンチを剣で受け流しその勢いのままグリズリーの脳天めがけて、右手一本の回し斬りを叩きこんだ。その一撃はグリズリーの頭を切り裂き、俺は勢い余って尻餅をついてしまった。

グリズリーは真っ赤なポリゴンとなって消滅し、切り裂かれて、宙に浮いていた頭にある深いブルーの瞳は、勝者を讃えるような光を含んでいるような気がした。

練習の終了を知らせるアラームがポケットから聞こえた。

今ならどんな硬い床の上でも寝れると確信出来るほどの疲労を感じながら、ポケットからポルを取り出した。ポルの画面には倒したモンスターの数や経験値、アイテムなどと一緒に、プレゼントボックスと名前の付いた、一つの可愛い箱が表示されていた。続いてレ

ベルアップを知らせるアラームが鳴り、スキルポイント振り分けという画面になった。

画面には何十種類ものスキルが映し出されていた。

一個一個丁寧に説明を見ていく。

戦闘用のスキルから、補助系のスキル、さらには趣味にしか使わないようなスキルまであった。

俺はそこから「両手長剣熟練度」「索敵」「体術」「隠蔽」「暗視」を選んだ。

ポルの説明によると、最初はスキルが五つしか選べない。レベルが上がるたびに枠が一つ増える。スキルはスキルポイントが溜まることによって、よりその効果を発揮できる。スキルポイントを上げる方法は二つある。

一つ目は、レベルが上がったときに得られる、五つのスキルポイントを振り分ける方法。

二つ目は、そのスキルに関する行動を何度も繰り返し、徐々に上げていく方法。

武器熟練度は二百、その他のスキルは百がMAXに設定してある。後者の方法でどのくらいのスピードで増えていくかわからないが、相当な時間がかかると予想できた。

どうやら初期数値があるようで、振れるスキルポイントは三十あった。両手長剣熟練度に十、その他に五振った。

武器の総合熟練度は初期数値の六十にスキルポイント×〇、二を足した計算。

武器熟練度スキルが百二十だった場合、六十にスキルポイント×〇、二の八十四となる。この数値は武器の八十四%の攻撃力しか引き出していない事を示している。

練習の時は武器総合熟練度を百の状態、つまりスキルがMAXの状態であったとの事だ。

今両手長剣熟練度にスキルポイントを十振ったから、総合熟練度六十二。練習の時の六割しか攻撃力がない。このスキルは初めのう

ち上げといたほうがいいと思った。

そのほかにもいろいろと今後に必要な情報を得ようとしたところで体を青い光と慣れつつある浮遊感が襲った。

初めての戦闘(後書き)

一話目です!!

更新は一週間に一回ぐらいを目指します!!

フイク

今俺は、この街、グランゼルにある宿屋の一部屋にいた。窓の外には星空が輝いている。時間は夜の十一時過ぎ。

この世界は現実の世界と比例しているらしい。あちらの世界よりこっちの世界の方が時間が進む速さが速い、ただそれだけは伝えられた。

こっちの世界の方が、アナザーワールドの方が、時間が進むスピードが速いからと言ってのんびりもしていられないが、今はベツトに転がりのんびりとしている。

理由はこの街から出られないからだ。管理者権限を使われ、セーフティゾーンより外へは出れないようになってる。まあ、出れただとしても数時間前の戦闘で疲れて外に出る気もなかったが。

俺は無意識のうちに実践戦闘練習後の光景を思い出していた。

地に足がついたと思ったら、体を覆っていた光が消えた。現在地は最初にいた広場、周りには青い顔をしたプレイヤー達の顔があった。

さっきの練習でひどい目にあっただろうと容易に想像がつく。

俺は真上を見上げる。そんなに時間は経ってないはずだともっていたが、空は茜色の夕焼けになっていた。本当に現実の世界のような空と一緒だと思ったが、こっちの世界の方が空が澄んでいて、綺麗な夕焼けだった。

空に浮かんでいた、ピエロぐるりと首を回して広場を見渡した。俺のところで視線が止まったような気がしたが、特に考えないことにした。

「お帰り諸君、練習はどうだった？」

「実に楽しかっただろう」

俺は少しは楽しかったかもしれないと思ったが、周りではそんな雰囲気は全くしなかった。動けないのは前回と同じだったが、この広場には暴動前の殺伐とした雰囲気のようなものが漂っていた。

「まあ感想はどうでもいいとして、今日はここから出れないようにしておくよ。興奮したまま全員が死んでもらっても困るからね。」

詳しいことはポルに転送しておくから、それじゃあぜひこのゲームをクリアしてくれたまえ。

がんばってねー」

そう言ってピエロは消えた。

同時に体の金縛りも解ける。

ほとんどのプレイヤーは暴徒と化した。当然と言えば当然だ、逆にいるさいなーと思っっている俺は特殊なのだろう。

俺はこの場を離れるために人の間を縫ってとにかく真っ直ぐに進んだ。

案外、すぐに人のいない場所まで来ることが出来た。俺はすぐそこにあつたベンチに座って、ポルを取り出す。

長剣は広場に來た時には消えていた。

とにかく情報が無いことには何もできないと思っ、ポルの情報観覧というところをタッチした。長々とした文が表示される。

俺はそれをスクロールしながら見ていく、読んでいくではなくて見ていく。理由は分からないが文を見るだけで情報が頭に入ってくる。

奇妙な感覚だなと思いつつも作業を続けた。

数分で全ての情報を見て、得た、俺は立ち上がった。

まず向かうのは武器屋。

ポルの機能のマップを見ながら、大通りを進んでいく。どうやらマップまでは見ただけで場所を覚えたりしないようだ。

数分歩くと、それと思しき店にたどり着いた。

中に入ると、外から見たよりも広い店の壁一面にいろいろな武器が並べられていた。

俺は剣の展示コーナーに向かう。途中で店員とすれ違って挨拶してみたらず、笑顔で挨拶を返された。

ポルで得た情報だが、このゲームのNPCは人に随分と近いらしい。行動は一定で、頭上にあるカーソルが灰色な事以外はほとんど変わらないとの事だ。

感情に近いものがあり、嫌われると話を聞いてくれなくなったりするらしい。極端なものだと、NPCがいる店を使えなくなったりするとか。

身震いしながら店の中を進む。

気になったものがあれば俺はそれを振ってみた。

スキルに登録していない武器も使える。しかし、熟練度が四十%という低さで実用性ほとんどない。しかもスキルを入れ替えるとなると、入れ替えられたスキルのスキルポイントはゼロまで戻るとあって、簡単には入れ替えも出来ない。

そんなにスキルポイントをためていない今ならまだ間に合うと言いう事で、いろいろと試してみようと思ったのだ。

両手剣は、別に両手で持たなくても使える。逆に片手剣でも両手で使える。

片手剣には盾を装備できるというメリットがあつて、両手剣にもリーチが長く、威力が高いというメリットがある。

慣れているということもあり、両手剣を選んだが、片手剣も捨てがたい魅力があつた。結局、盾は使い難そうだということをやめたが。

両手剣の中にもいろいろと種類があり、特に目を引いたのが、太刀だった。

練習では真っ直ぐで両方に刃のついた長剣を使ったが、慣れているという点では、太刀の方が上だろう。剣道は日本の剣術だから、

といつても真剣は使ったことはないのだが。

なぜ俺はあの時長剣を選んだかという、それっぽいからという理由だ。

実際使ってみて使いやすかったが、それは狙ってやったことではない。ただ単にファンタジーの世界なら刀より剣の方が合っていると思ったのだ。

どっちも魅力的ではあるが長剣は、俺に合うようなので長剣を買うことにした。

たくさんある中から、どれにするか選ぶ。幸いお金は練習の時の報酬で結構あった。

俺は一番強そうな剣を手にとってみた。練習の時に使った剣よりも随分と軽い。スキルだけじゃなくて剣も随分いいものを使わされたのかもしれない。

俺は数ある中から、一番重い長剣を探す事にした。

ポルに表示されている時間を見ると随分と時間が経っているようだった。このペースで防具屋と道具屋に寄ると宿屋に行くのは深夜になるかもしれない。

俺は急いで剣を選ぶことにした。

悩んでいるのは三振りの長剣。

重さはどれも一緒ぐらいだが、細く長いもの、太く短いもの、中間ぐらいのもの、値段もどれもほとんど一緒で、後はどれが一番振りやすいかだ。

太いものが短いと言っても、標準と一緒ぐらい　標準はどれくらいか分からないが、ここにある中で平均的なもの　なのだが、どちらかという長いほうが振りやすい気がした。

ただ、長すぎるのもどうかと思って、太い一本を除いた二本で決めることにした。両方買ってもたぶんお金には余裕があると思うが、装備を持てる容量は決まっている。

持てるというのは、ストレージに入る量であって、実際に手に持

って運べる重さの事ではない。

装備や道具はポルの中にデータとして、保存することが出来る。使うときには、実体化すればいい。

とても簡単で、とても便利な機能だと思った。他にもいろいろと便利な機能があったが、どれも試したことはない。

どちらの剣にするか全く決まらず、さらに十分が経っている。

「こんにちは」

俺が「うーん、うーん」と唸っていると、背後から声をかけられた。

突然の事にビクツと過剰に反応してしまつて、後ろに振り向くの少し時間がかかつたてしまった。

目の前には、全身を茶色の帽子着きのポンチョで覆つた、女性が立っていた。帽子はかぶっていないがもしもかぶっていたらもつと警戒しただろう。

年齢は二十代だろうか、とても美人だった。表情がどうにも読みにくい、もともと読心術なんかの心得はないが……。

女性はじつとこちらを見ている。

こつちの世界に来て、初めてまともにと会つた気がする。しかし、今俺の心にあるのはポジティブな

イメージよりもネガティブなイメージ。

「何か御用ですか？」

俺は出来るだけ感じのいい愛想笑いを浮かべながら訊ねた。

「うん、お名前はなんというの？」

質問は簡単なものだった、しかし、俺はその質問に答えることが出来なかつた。

カルラというのが俺の今の名前だ。

でも本当は、前は、違う名前だった気がする……。

「無理に思い出さなくてもいいわ、私も分からないから。今の名前は？」

「・・・カルラ」

俺は思い出せない、というよりすっぱりと忘れてしまった名前と違う名前をとて小さな声で言った。

男が無反応なのを見て、もしかしたら聞こえなかったかもしれないと思つて、もう一度名前を言うために口を開きかけたが、俺が口を開く前に女が口を開いた。

「渡の名前はレイスよ。」

ここで会ったのは何かの縁ね、ちなみに敬語はいらない」「分かった。よろしくレイス」

俺は女の申し出を遠慮することなく受け、右手を出した。

警戒を解いたわけではない。しかし、不思議なことにこの女の事は信用していいかもしれないと思つていた。

俺は人見知りじゃないが、その逆でもない。ただなんとなくいきなり出会つたこの女性には好感を持てた。

表情は基本的に無くて、なにかしらの雰囲気を出している。しかもその雰囲気というのがまた異質であった。どんな風に異質なのかを説明するのは難しいが、敢えて言えば忍者のような感じ・・・目の前にいるのに気配が全く感じられないあたりが。

「その二振りの剣で迷っているの?」

俺は頷く。

「振ってみて」

言われた通り、片方ずつ何度か振ってみた。

「ふーん、慣れてるね、どこかで鍛錬をしていたのかな?」

ううん・・・勘繰りは止めておくよ、君にはその長い剣が合ってる」

言うなり女性は微笑んで「またどこかで会おう」と去って行った。「なんだつたんだ・・・」

俺はモヤモヤとしたものを感じたが、長い剣を購入することにした。

防具屋と道具屋で必要なものを買ってから、宿屋に着いたのは十時半だった。

軽く四時間の買い物だった。

こんなに長い買い物したのは初めてだなと思う。

今日は特別だが、NPCシヨップは夜の八時までしか営業してないようだ。

九時あたりからプレイヤーもちらほらと見えるようになっていた。話しかけられたのは、武器屋での一人だけだったが……。

そのあとはいろんなことを考えて、十二時には眠りに落ちた。

肩の傷は広場に転送されたときに消えたが、ものすごい疲労感が残っていた。

しかし目を覚ますと昨日の疲労感は嘘のようにすべて消えていた。いくら毎日厳しい修行を積んでいた俺でも、あれだけ激しい運動をすれば、筋肉痛まで行かなくても脹脛はくちんが張っていたりすると思っていたのに全くの快調だった。

うれしいことではあるが、妙な違和感はある。

それにしてもお腹が減った。昨日から何も食べていない。

ポルの情報で生理的な欲求はアナザーワールドでもあるというのは知っていたが、実際に体感するとこれまた不思議な感じだった。

食欲の感覚が変なのではない、この世界の肉体は本物ではないのに食欲があるという点が変なのだ。

この際、そういう疑問をすべて放っておくとして、次の問題は、何か食べたところでこの欲求は収まるのかという問題だった。

ものは試しだと思って、宿屋にある十ベルのパン　宿屋のおばちゃんおばちゃんが売っている　を買って食べてみた。通貨はベルという現実世界の十円よりは一ベルの方が少し価値が高めだなと思う。

十ベルのパンは結構な大きさで、味こそ普通だったがお腹は十分

に満たされた。のども乾いたので、ハベルで牛乳を買って飲んでみた。喉は潤い、現実と何も変わらない。

しかし、排出に関してだけ別のようで、やりたければやってもいい。なんとなげやりな設定。もちろんやらなくてもいいというのだからやらない。

太ったり、痩せたりということもないらしい。実に興味深い。

時計を見るとまだ六時半、いつも早朝から素振りをしていたので、今日も目が覚めた。素振りの後で朝食を摂ってたから今日は少し早目の朝食だった。

部屋に戻って、寝間着から防具屋で買った装備品を身に着ける。

寝間着は部屋に置いてあるものを着かったが、洋服屋で自分の者も買えるらしい。

下着や普段着も買えるらしいが、そんなものまで買うほど所持金に余裕はない。もともと変えなくても汚れないらしいし、そこは気持ちの問題だろう。

防具に金属類はほとんどない。分厚い布の装備だ。

自分の剣は、パワーよりスピードと親父に言われたことがある。だからスピードには自信があった。避けきれない攻撃なんかもあると思うが、無駄に装備を付けて動きが鈍くなるよりはマシ。

防御力も布の中では一番高いものを選んだ。布と言っても現実世界では考えられないくらい丈夫だという、素材が違うとかなんとか。丈夫な割に軽い素材で動きやすい装備である。

色は真っ黒だ。そういう趣味というより、派手な色の装備を着けた自分を見ると、とても滑稽で恥ずかしいという感じだった。

服の上下とグローブ、後はスニーカーのような靴。この靴はつま先と足の裏に鉄が入っているらしい。防具の中では唯一の金属である。

剣は鞘を腰に着けるタイプじゃなくて背中に着けるタイプにした。

これは腰に着ける方がよかつたのだが、腰に着けるタイプだと、長剣が地面に擦れるという要因によって却下となった。身長は一七五と高校二年生の平均位だが、この長剣が長すぎた。

長剣を背中の鞘にしまって、ポルを取り出してこれからの旅に持っていく道具を確かめる。用心に越したことはないと思って、昨日回復ポーションを買いすぎたせいで、財布はほとんどカラだ。

後戻りはできない状況。モンスターに勝ち、生きる糧を得るか、モンスターに殺され、そのまま永遠に目覚めないか。

これからは実力の世界だ。そう思いながらポルをポケットにしまって、部屋を出た。

そこには眼鏡をかけた、ヒョロツとした少年が立っていた。たぶん同い年か一つか二つ下だろうと思う。

「こんにちは。僕も一緒に連れて行ってくれませんか？」

俺は少年をジロジロと観察する。

防具は簡単な皮装備で自分のよりいくつかグレードが下に見える。木の盾と短い片手剣を担いでいた。「使い物になるのか？」と思っただが、もちろん口にしない。

「構わないが、足手まといにならないでくれよ」

俺は少年に一瞥されると、歩き出した。正直に言えば着いてきてほしくなかったが、まだフィールドに一度も出たことがないのだから、一人くらい連れがいてもいいだろうと思っただけだ。

宿屋を出て、グランゼルの南門に向っている。門は北にもあるがそこはまだ開いていないらしい。攻略の進行具合によって解放されるのだろうか。

頭の中で、グランゼルの全体図を大まかに想像しながら考えていると、

「あ、あの僕の名前はフィクです」

後についてくる、少年はいきなり自己紹介をしてきた。

容姿と表情から、寡黙な性格だと思っていたからすこし驚いた。どうやら最初は緊張のあまりガチガチになっていたようだ。

「俺はカルラだ」

短く自己紹介を終わらせる。

少し早目のスピードで歩いているため、一六〇ぐらいの身長の小柄のフイクは小走りとなっている。

「カルラさんって高校生ですか？」

「ん？高校二年生だった」

俺はなんとなく過去形で答えてみる。

「そうですね、僕より一つ上ですね」

少し前の方を後ろ向きで歩きながら頷いている。

「ふーん、にしても何で俺についてきたんだ？」

俺は当然の疑問を今更ながら口にする。初めての旅の前の支度時間がかったが、部屋を出たのは七時過ぎぐらいだ。

それに宿屋から出てくる人を狙うんじゃないかと、ピンポイントで俺の部屋の前に立っていた。なにか用があるのだろうか？

「あなたが強そうだったからです」

帰ってきた答えは全く予想していないものだった。

「はあ？俺は強くないし、仮に強かったとしてもなんで強いつてわかるんだよ？」

「強いとは言っていないません。強そうと言ったのです。あなたは昨日の混乱の中で、素早く行動を起こした人物の一人でした。それに、あなたは随分と楽しそうに見えたので・・・」

それが理由になるか分からないが、確かに混乱していた輩より落ち着いていた奴らの方が、まだ信用できたのだろう。

それにしてもと思う。

「お前も随分と落ち着いていたんだな。自分だけじゃなくて、周りまで気にできるなんて」

「騒いでも仕方なかったですしね。それにこれから先に自分一人では何もできないと思いましたから」

つまりこいつはあの時の模擬戦闘で、とうるか実戦で自分の力を見極めて、さらにどうすべきか考えたのだ。頭はいいんだと思う、顔からしてそうだったが。

「お前モンスターは何匹倒せた？」

「残念ながらギリギリ三匹倒せただけです。もう腰が抜けてしまつて・・・」

「武術の心得がない人にとってはこれが普通なのだろうか？」

「ってことはさ、これ見てない？」

俺は立ち止まってポケットからポルを取り出し、情報観覧ページに進む。

「いえ・・・そんなにいろいろ書いてなかったと思います。見せてもらってもいいですか？」

目を丸くして覗き込んでいるフィクに俺は苦笑してポルを渡した。フィクは「フムフム」「なるほど」などと呟きながらポルを操作していた。数分で文章を読み終わり、なにやら納得したような表情で何度も頷いていた。

「どうだった？」

「あ、しません！！ちょっと興味深かったものですから」

俺の存在を忘れてたのか派手に頭を下げて謝るフィク。

「どこらへんが？」

俺はポルを受け取りながら訊ねてみた。

「えーっと、そうですね。僕向こうでは、結構この手のゲームをやっていたんですよ。仮想型ゲームでもいうんですかね？」

そのゲームではここまでのクオリティはなかったというか、まったく次元が違います。でもこっちの世界にもゲームと同じようなシステムがいろいろと使われているようですね」

そういうゲームをやったことも、そういう知識もない俺は首を傾げることしかできなかつた。

「つまり、この世界は現代の技術ではほとんど不可能なレベルなんですよ！！」

なんらかの技術の確変があつたとしても、ここまで一気にクオリティを上げることは出来ないと思います」

「……………」

でも、実際出来てるしなーと内心で思った。それにこんな事を話しても、分からないものは分からないし、何も得られないと思う。

「なあ、フイク。お前目が悪いのか？」

「あ、これは慣れですかね。」

こつちの世界だと眼鏡なくても見えるんですけど、向こうで着けてたんで、ないと落ち着かないというか…………。

こつちに来た時から持つてて、一応タダなので着けててもいいかなーと…………」

質問をそのままの意味で受け取ったフイクはそう答えた。

「それは興味深いな。こつちの世界に来ると、潜在能力だけじゃなくて近視みたいな病気も治るのか」

普通に目が見えると思ったのは、自分の目も少し良くなってる気がしたからだ。もともと悪かったわけではないが、それでも今まで以上によく見えていた。

聞いたかかったのはこの世界に来ると全員が同じステータスになるのかということだった。病気とかという点において。

「もしも普通に見えるんだったら、着けない方がいいぞ」

「なんでですか？」

「邪魔だから」

俺は簡潔に答えたが、その言葉の意味することを読み取ったのか、フイクは眼鏡を外してポルを使ってアイテム欄にしまった。

この世界では一瞬の隙が死につながる。眼鏡が邪魔で戦えなかったなんてことは許されないのだ。

その後も喋りながら、南門を目指した。

眼鏡を外したフイクは、爽やかな好青年という感じで、頻繁に見

せる笑顔はとてもまぶしいものだった。別に男性に気があるという訳じゃないぞ。

「見えましたね」

小道から大通りに出たところで右手に大きな門が見えた。グランゼルを囲む堀の高さが約三メートルぐらいで、その門はその倍はあった。

両脇には衛兵らしき人物が立っている。この衛兵は、ただ立っているだけじゃなく、犯罪行為を犯したプレイヤーを街に入れないようにしているのだ。ただ、ステータスは最強に設定してあるわけではなく、不死設定だが、ある程度の実力のあるプレイヤーには負けるといふことらしい。

よって犯罪プレイヤーは一応街に入れるのだが、犯罪行為をした時点でそのプレイヤーの頭上のカーソルは赤色となり、NPCショップは全て使用できなくなる。犯罪者がつかまった場合、グランゼルの牢屋に入れられる。

一応刑期なんかもあるらしいが、詳しいことはあまり分からない。犯罪者を捕まえて牢屋まで送ると報酬金がもらえる制度もある。懸賞金という奴だ。

と、まあそんな事を考えている内に門の下まで来ていた。

今のところいないが、数時間もすればたくさんプレイヤーが溢れるだろう。

「パーティー組んでくれませんか？」

俺は「OK」と答えて、ポルを操作しパーティーを組んだ。

パーティーは最大六人で、パーティーを組んだ人にはダメージを与えることが出来なくなり、経験値やアイテムが分配されるシステムだ。そのパーティーをさらに組み合わせた、レイドというシステムもあるが、それはボス戦以外で使われることは滅多にない。

俺はフィールドの一步手前まで来て立ち止まった。

「三つだけ約束してほしい」

「はい」

俺の真剣な表情にフイクも真剣な表情になって答える。

「一つ、危ないと思ったら逃げろ」

フイクが頷いたのを見て一泊置いて進める。

「二つ、絶対に俺の指示に従え」

これにはフイクが目を丸くしたが、正直に頷いた。

「三つ、これから先、自分の事だけを考える」

最後のは極端すぎたと思ったが、フイクは「はい」と短く答えただけだった。

少し話して分かったが、こいつはお人好しすぎる。それは長所でもあり、短所でもある。これから先、自分の事しか考えない奴らはごまんと出てくるだろう。

ただ、それは正しい。命がけの世界で、他人の面倒を見られるほど、人間は強くない。いや、自分の事だけで精一杯なほど弱いと言った方がいいかもしれない。

自分の事もろくに守れない奴が、他人を守ろうなんて馬鹿馬鹿しすぎる。

「僕は自分の身だけを考えます」

フイクはそう言って眼前に広がる草原を見た。

整った顔にひよろひよろの体、優しい心に決意が溢れる瞳。王子様みたいだなと思ったりしてしまった。

俺は頷いて最初の一步を踏み出した。

フイク(後書き)

全然進まないww

ヒロインとかいつ出てくることなるやっ……。

とにかく三話目です。

読んでくださってる方ありがとうございます

森の村へ

それにしても壮大な光景だ、天気は快晴で 悪天候の事はあまりなく、現実と同じ三六五日に四季があるらしい。ついでに今は春、四月中旬と言ったところだ 風が心地いい。

一面の草原にはモンスターの姿など全然見当たらない。

向かって右手には森、左手には山、正面には湖が見える。山の方はまだ進めない（不可侵領域だから）。湖は一応入れるらしいが、水中にもモンスターはいるらしいから危ないということ却下。

「森だな」

「はい」

頷きあつて、俺とフイクの二人は歩き始めた。

現在地は第一の島のほぼ中心辺り、少し北にあるグランゼルを境に北へはいけない状態になっている。不可侵領域であるからだ。境界線は見るからに越えるのが厳しそうな山。まあグランゼル内の北門が開けばあつちに楽に行けるんだろうけど。

したがって今は南に進む必要があるのだが、マップの広さが異常だった。湖には水平線が見えている。もう海だな海。

森までも約一キロ以上はある。モンスターの姿は見当たらないが、まだまだ街から出たばかりでそんなにうじゃうじゃいてもらっても困るが、少し拍子抜けした。

ただ、この広さの島を歩いて移動するには少し時間がかかるということで、今は走っている。

疲れは全くない、この世界では走るという行為はあまりスタミナを消費しないらしい。ただ、戦闘になると一瞬のダッシュや重い剣を振ったりするから、消費が激しい。集中力を保ちながら動くということが疲労の蓄積を加速させる。

と、そういうことで、今はかなりのスピードで走っている。ダッシュの八割まではスタミナの消費は抑えられるらしい、ステータスの関係でトップスピードはアスリート並だ。

ついでにステータスについて触れておこう。

この世界での強さを決めるのは、STR（筋力）、AGI（俊敏力）、VIT（生命力）、DEX（器用さ）である。

STRは筋力を増加させる。

AGIは素早さを増加させる。

VITは体力（HP）と防御力を増加させる。

DEXは器用さ おもに遠距離の攻撃に関係してくる。弓使いなどは必須 を増加させる。

といった感じだ。

この数値はAPと呼ばれるレベルが上がった際に自動的に振り分けられる。振り分けられる数値を決める点は三つ。

まず、体型。体のサイズが大きければSTRとVITの増加量が大い。体のサイズが小さければAGIの増加量が大いといった具合だ。

次に、戦い方。これは攻撃特化で戦う人なら、STRが伸びたり、大きな武器や重装備で戦っていればSTRとVITが上がり、スピーディーに戦う人ならAGIが上がりやすいといった具合だ。

弓や遠距離攻撃を使う人はDEXの上昇もあるらしい。他の職とどうか、武器が近距離の人は基本的にDEXは増えない。

最後に、考え方だ。これは興味深く、戦い方にも影響してくるが、肉体と肉体でガチンコ勝負を望んでいる人ならVITが上がり、攻撃を受けるのが怖いと思っていたりすると、AGIが上がるらしい。細かいことは分からないが、その人にあつた数値に上がっていくということだ。

俺の数値は体型が少しやせ気味で、戦い方は防御と言うより、相手の攻撃を避けて隙が出来たところに大技を繰り出すような戦い方思考、考え方については、自分ではよく分からない。まあ、ガチン

「勝負は嫌いじゃないと言っておこう。」

数値はSTR、AGI、VITの順で、四対五対二位の振り分けだ。ちよつと体力、防御力に不安があるが、防具も回避優先で買ったので文句は言えない。ちなみにDEXはほとんどない、初期値から三ぐらい増えただけ。

客観的に見るなら、スピード攻撃タイプかな？と思う。今はまだ二レベルだから、体型がほとんど決めている状態ではあるが。

初期値が一 あったから、戦い方と考え方については、今のところ一割ほどの影響力だ。

フィクはと言うと、超バランス型、ひよろい体系の割にVITの数値も意外と多い、まだ二レベルだから体型がすべて決めている状態。まあ体型については、だいたいらしいから深く考えないようにしよう。

ちなみにレベルが上がるとスタミナもあがるらしい。計算式の情報はなかったが。

「カルラさん二レベルって事は、やっぱりすごく強いんですね。モンスターたくさん倒したから、経験値がたくさん入ったはずですか」

「強いかどうかは置いといて、練習の奴らは一応全部倒したよ」
目を丸くしているフィクに俺は苦笑する。

既に草原を抜けて、森の少し入ったところに来ている。見通しが悪く、足場が悪いので、周りに警戒しながら歩いている。

目指しているのは、グランゼルの南西にある村、パレンド。森の中にあり、ここから一番近い。村にはクエストを受注できる酒場があるらしい。

グランゼルは大きさは全ての街の中で最大らしいが、その半分以上を宿屋で占めている。ここに囚われている人間、ポルによると総勢十万人の人々が楽に入る事ができる容量がある。

そのほかに、レストランや公共施設が多くあって、生活する分にはとても便利な街なのだが、武器屋や防具屋、道具屋以外の攻略

に関する施設がないのだ。

その三つの店は数店舗あるが、クエストを受注する酒場、ギルドを作るための教会などの施設がない。

ギルドはともかくクエストが受注できないのは厳しい。クエストは一般のNPCからも受けられるが、グランゼルにはNPCの数も少ない。というか、初期の街なのでほとんどクエストは発生しないとが。

クエストの重要性についてはフィクに教えてもらった。

俺はほとんどゲームというものをやったことがないが、フィクは結構やり込んでいたプレイヤーだったらしい。ここに来て冷静でいられたのもそのせいと言っている。

「まあ、あれは操作するだけですしね。こっちだと自分の体で戦わないといけないし、どうしてもモンスターの迫力にビビっちゃうんですよね」

フィクはそう言って苦笑い。

「そんなことないって、お前の情報も役に立つよ」

「いえ、さっき見せてもらった資料に比べたら、全然ですよ」

俺も苦笑いする。

と、全く警戒心を失っていたところで、前方からモンスターの声が聞こえた。かなり遠い場所だがかなり興奮していることがわかる。よく耳を澄ますと、人間の悲鳴のようなものも聞こえた。

「行ってみよう」

フィクの事をお人好しとか言ってたけど、俺も十分お人好しだなと思った。

茂みから様子を覗く。

そこには三人の男たちが何匹ものモンスターに囲まれていた。

一人のHPバーはもう黄色になっていて。アリのようなモンスターは徐々に男たちとの距離を詰めていた。

フイクの様子を見ると、今にも飛び出しそうだった。

モンスターの強さがわからない以上、飛び出すのも危険だ。数が数だし、倒せないことはないと思うがこいつ等のほかにもつと沸いてくる可能性もある。

なんとたつてアリのくせに鳴くんだから。

キリキリと歯ぎしりのような音を立てている。今になって思ったが、なんでこれをモンスターの声だと分かったんだろう、とそんなことを考えている内に男たちはアリの攻撃範囲に入ったようだ。

アリが男に飛びついてかみつき攻撃を繰り返す。スピードは言うほど速くないが、男の体は固まっていて、避けれるものも避けられない。

男はもろに攻撃を受ける。そいつのHPバーも黄色となり、自分のHPバーを涙目で見ていた。

「フイク、俺が突っ込むからお前はその隙に三人の所へ行け」

「で、でもそれじゃあカルラさんが・・・」

俺は鋭くフイクを睨む。

「俺の命令には従えって言っただろ」

「・・・分かりました」

渋々といった感じで、フイクは頷く。目には不安の影が見られた。「じゃあ行くぞ」

言うなり俺は駆け出した。すでに三人ともHPのゲージは三割を切り、赤色になっている。

アリたちはこちらに全く気付いていない。俺は一番手の前のアリに向かって背中から取り出した剣を振り抜いた。

剣はアリの硬い甲殻をぶち破り、そのまま地面に浅く刺さった。今更地面が土でよかったと思う、石の床とかだったら、余裕で手が痺れていただろう。

もつと考えて行動しろ！！心の中で自分で自分を叱咤する。

すぐに剣を抜いて、次の敵に向かう。すでに最初のアリはポリゴンとなって弾けていた。

二匹目のアリを倒し終わる頃には、全てのアリがこちらを向いている。数は残り六匹。防御力は硬いが、体力は少ないようだ。

攻撃力はダメージを受けていないので、分らない。男たちの消耗具合を見ると、言うほど高くないだろう。さつきもクリーンヒットを受けていたのにもかかわらず二割程度しか減っていなかったし。俺は長剣を横薙ぎに払う。

こちらに寄っていた三匹のアリがふつとばされて、他のアリにぶつかる。たいしたダメージは受けていないようだが、相手の体制は崩れた。そこへいいタイミングでフィクが走ってくる。どうやらフィクにはだれも気付いていないらしい、男たちを含めて。

フィクはアリの真後ろから、思いつきり片手剣を振り下ろす。一発では仕留めきれなかったようだが、背中の甲殻は大きくへこんでいた。

この世界の攻撃力は、武器の攻撃力（熟練度などを計算した）、攻撃のスピード、攻撃の重さ、攻撃が当たったポイント、タイミングの掛け算で決まる。

武器の攻撃力はそのままなので特に触れない。

攻撃のスピードに関してはSTRとAGIが関係してくる。どちらかというところ攻撃だけの、武器を振るだけの速さならSTRの方が重要と言える。いくらAGIの数値が大きくても武器を満足に振れないようでは元も子もない。

攻撃の重さは、武器の重さとプレイヤーの技量による。

ポイントは、モンスターによって攻撃の効きにくい場所と効きやすい場所があるとだけ言っておこう。

最後にタイミングだが、これは不意打ちや相手の体勢が悪い時に大きなダメージを与えられると言う事だ。

これらが、一瞬のうちで演算されモンスターにダメージとして与えられる。

さらに部位によって、ダメージが蓄積されると部位破壊という現象が発生する。これは、足を重点的に攻撃したりすると、足が切れ

たり、その足が使いものにならなくなったりするバッドステータスのようなものだ。

今でいうと、甲殻が砕けたり、凹んだりすることだ。部位破壊が起こると相手の動きが制限されたり、追加ダメージが与えられる。

と、ポル引用。

フィクの不意打ちは結構いい感じに決まったのだが、少し振りが遅かった。

やはり剣術初心者だ。「危なっかしー」とひやひやしたが、どうやら一人でも十分戦えるようだ。

飛びついてくるアリを盾を使って弾いている。衝撃ではんの少しずつHPバーが短くなっているようだが、気にするほどではない。

飛びかかってくるアリに突きや斬撃をお見舞いする。俺は自分の相手する分の敵を片づけたところで、フィクの援護に行く。

フィクは必死に攻撃を防御しながら、カウンターを決めている。額からは汗をダラダラと掻いていた。戦闘の激しい運動で掻いた汗だけではないだろう。

フィクは飛んでくるアリに向かって突きを繰り出した。

思わず「ほう」と呟いてしまった。その突きはきれいにアリの弱点である腹に刺さった。アリの鋭い牙はフィクの眼前数センチというところで止まっている。

アリがポリゴンとなって消えると、フィクはその場にへたり込んでしまった。

「よくやった」

フィクの頭をわしわしと撫でてやる。フィクは「疲れましたよー」とか「怖かったですよー」とか言いながら微笑んでいる。

大ダメージこそ受けなかったが、フィクのHPは七割を切っていた。相当安心しているんだろう。

俺はフィクに微笑み返してから、男の方たちに目を向けた。

男たちは、未だに少し震えている。本当にだらしがない。

「大丈夫か？」

俺が声をかけると、我が返ったようにいきなり偉そうな態度をとる。

「ああ、俺の名前はレグロだ」

一番の大きな男が言った。身長は一八五はありそうな大男だ。

「助かった」

そういつて他の二人は軽く頭を下げた、本当にほんの少し、もしかしたら首を振っただけかもしれない。

俺はフイクに手を貸して立ち上がらせながら男たちに訊ねた。

「こんな早くから、旅に出たにしてはちよつと頼りないな。おいしいクエストでも狙ってたか？」

クエストには回数制限のあるものや一日に一回しか出来ないクエストなんかがある。より速いプレイヤーが優先されるというありがちな設定……らしい。

フイクも実はこれを狙っていたらしく、いち早く他の町や村に行くためにカルラに付いて来たそうだ。

ずる賢いと思うが、別に嫌悪したりはしない。

「……ああ、そういうことだ。しかし運の悪いことにモンスターに見つかってしまった。

それよりお前たちもクエストを狙っているんだろう？

ならばこれからは敵だ。今回は礼を言っておくが、次会ったときは容赦はしない」

そう言つて、大男は腰から曲刀を出した。ただ攻撃の意味はないらしく、見せつけただけで、腰にしまった。

何の冗談を言っているんだこいつは？

俺の言ったことが皮肉に聞こえたのだろうか……。

「行くぞ！！」

リーダー格なのだろう、大男、レグロはそう言つて二人の男を引っ張って行く。脇の男二人は、申し訳なさそうな目でこつちを見ていた。

「なんだあれ？」

「ほんとですね！！せっかく助けてあげたのに、モンスターがいなくなったら随分偉そうになってさー！！」

「フィクはえらく憤慨しているようだった。」

「まあ、気にスンナって、別に見返りを求めて助けたわけじゃないだしさ」

「ほらこれ」

俺はフィクに回復ポーションを渡した。

「あ、ありがとうございます」

そう言っただけでポーションを飲むが、どうやら相当まずいようだ、顔が歪んでいる。

その顔に思わず笑ってしまう。

「笑わないでくださいよ、すっごい苦いんですから」

「わ、わるい・・・」

フィクのHPバーが徐々に伸びていく。

一気に回復するのではないらしい。

「それにしてもカルラさんは全然ダメージ受けてないですね」

「まあ、思ったよりも敵が弱かったしな」

そう言っただけで頭上を見る。HPは592/600とほとんど減っていない。

「それよりもポル見てみる」

「え、はい」

戸惑いながらもフィクはポルをポケットから取り出す。

ポルの画面には今回の戦闘で得た経験値とアイテムが載っていた。景気のいいファンファーレが鳴ってレベルアップを知らせる。

「わあ、レベルアップしました」

嬉しそうにはしゃいでいる。

戦闘の途中ではなくて戦闘の後にレベルアップをするのは自分のレベルが上がったときに気付いた。この情報はポルに載っていない。基本的なことでもポルに載っていないこともあるらしい。

「そういえばフィクはスキル何選んでいるんだ？」

自分がレベルアップしていないことは回復ポーションを取り出したときに気付いている。

「えーっと、片手剣熟練度と索敵と投擲と盾熟練度と空間把握ですよほどレベルアップがうれしいのか満面の笑みで答えるフィク。

「えーっと空間把握って何？」

俺は全然知らないスキルに首をかしげる。

「えー！！カルラさん空間把握、取ってないんですか！？」

空間把握っていうのは、相手との間合いとか剣のリーチがなんとなく分かるっていう、武術の心得がない人にはとても便利なスキルですよ」

うーん間合いか・・・そう思いながらポルのスキル画面に進む。

しかしそこに空間把握というスキルはなかった。

「そんなのないんだけど・・・まあ、剣の戦いは慣れてるから別にいらなかな。間合いが分かるっていうのは魅力的だけど」

「カルラさんは元からそういう能力があったから必要ないんじゃないんですかね！！」

うれしそうに答えるフィク。なにがそんなにうれしいのか・・・。

「それにしてもカルラさんソロ用のスキルばかり上げてますね。

わざとですか？」

「いや、少し知識が足りなくて、とにかく必要そうなのを取っただけだ」

俺は正直に答える。別にソロで活動しようと思ったわけではない、少人数の方がいいとは思っていたが・・・。

「そうですか。」

それにしても人によって違うスキルがあるのは、新しい発見ですね。出現条件があるスキルもあるらしいです・・・。

フィクは考え込むようなポーズを取った。

「とにかく、パレンドに急ごう、こんなところで油を売っていても仕方ないし」

俺はそう言って、歩き出した。「待つてくださいよー」というフイクの声を背中に受けながら。

前方に村が見えてきた。直線距離は二百メートルほどだ。

あの後数回モンスターの群れと遭遇した。気付かれないように通り過ぎようとしたのだが、フイクは隠蔽スキルを取ってなかったから、二回に一度は戦う羽目になった。

ほとんどはカルラが相手をしたが、フイクもなかなかの活躍を見せた。徐々に慣れていくようだ。

十近くあのアリ型のモンスター『ジャイアントアント』と戦った。あの後はどちらもレベルアップしなかった。「どれだけ厳しい設定なんですかー!!」とフイクがぼやいていたが、スルーしておいた。

その時内心では、このゲームをクリアするまでの計算をしていた。このペースだと一日一レベルとしても百レベルまでには百日かかる。そしてラスボスは百日後ぐらいに出会えるだろうと。

だがその考ええお話すとフイクに呆れられたことは言うまでもない。

フイクの話だとクリアまでは数年かかるかもしれないか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8452w/>

Chaos of Hell

2011年9月26日21時58分発行